

中国漢方史

原始時代の野蛮人たちは、もちろん病気もクソも何もかも分からない時代がありました。従って突然家族が熱を出したり、痛がったりしたときには、ただオロオロただけでしょう。このよう異常な状態を起こす原因は、体内に入った異物であるなどということは全く分かりようもありませんでした。中国においても徐々に未開から文明に足を一步ずつ入れるにつれて、病気を治すために祈祷をしたり、神の力を借りるために奉納したり踊ってみたり、さらに神の呪いを解いてもらったりするような、愚かな呪術的な医療が行われるようになりました。そのうちに神に祈ったところで病気が治る訳ではないということが徐々に分かりだしました。今でも未開な社会では、いや愚かなことに文明社会でも病気の原因は神の仕業であるという訳で、まじない、占い、お祈りをしたり、さらに宗教を信じたりしていますが、無駄なことです。

さらに中国文明が発達するにつれて、人間と自然の関係についても理解し始めました。人は生きていくために必要な食べ物も空気も、すべて自然界に頼り、これらの産物は天と地によってもたらされるので、人間の生命も大自然の一部であるということを知り始めたのです。人間の体の仕組みも大宇宙である大自然の営みによって生まれた小宇宙であると考えたのです。

次にこのような大宇宙や小宇宙がどのようにして生まれたのかを考えました。気の思想であります。気の思想は、戦国時代から秦漢の時代に老子や荘子によって確立されました。気の思想とは何でしょうか？古代中国では気を空間と時間の中で生ずる具体的な出来事として解釈したのです。この気は何から成り立っているのでしょうか？相反する性質をもつ陰陽2種の気から成り立っていると考えました。万物の變化生成はこの2気の象徴によるものとしたのです。この陰陽思想から全ての中国医学が発せられたといっても過言ではないのです。

例えば天地万物の生成については、まず宇宙の始まりは混沌としたものがあるのみだったのですが、この混沌から気が生じて陰気と陽気が生まれたのです。天地の生成については、軽い気はあがって天となり、重い気はさがって地となったというわけです。万物の始まりはまず天地の陰陽の2気から四季が生じ、さらに気が形となり人を含めて万物が生じると考えたのです。人の生命の始まりは、陰気の母と陽気の父の気を受けて、これが合体して一個の生命が始まるのです。人間の活動は天の陽気と地の陰気を取り入れて生命活動を維持するのです。生・病・死については体内の陰陽の気が調和すれば健康であり、陰陽の気が不調和になると病気になる、気が散逸してなくなると死んでしまうのです。

皆さん、この気の実態は何だと思えますか？単に中国の古代人が勝手に考え

だしたアイデアにすぎないと思われませんか？気については今なお認めない人もいますし、一方では今でも気の本体を探ろうとしている人もいます。私の答えは次のようです。気とは、一言でいうと、エネルギーでありエネルギーの働きであるといえます。森羅万象はエネルギーがなければ生まれ変化することは絶対にあり得ないのです。あらゆる活動の源として大宇宙、小宇宙に存在する力ともいえます。さらに言えば、熱、光、電磁気、さらに質量までもエネルギーの一形態であることが明らかにされたのです。植物は太陽光線のエネルギーを科学的エネルギーに変えることができます。動物はこの科学的エネルギーを食物として摂取して初めて生きながらえることができるのです。植物を作り出した科学的エネルギーを人体に必要な熱や機械的なエネルギーなどに変えて体温を維持したり運動ができるのです。皆さん、エネルギー保存の法則の原理をご存知でしょう。外部からの影響を受けない物理的な孤立系（太陽系）とその内部（地球）でどのような物理的、あるいは化学的変化が起こっても、全体的のエネルギーは不変であるという法則です。無からのエネルギーを創造しえないということを示す物理学の基本原則であります。私はこのような原理を中国人は気という思想でまとめあげたと考えています。結論から申し上げますと、病気における気は免疫の遺伝子のエネルギーを指しているのです。病気の病は病原菌のことであり、病気とは病原菌と免疫のエネルギーの戦いにおいて生じた現象と言えるのです。このことをは後で詳しく述べましょう。この世に存在する万物間におけるエネルギーのやり取りが現象であり、その現象は時間の中で生々流転していくのであります。

気の思想は戦国時代から秦漢期にかけて老子や荘子が発展させたことは述べました。戦国末期の『呂氏春秋』という本において病の要因を気の鬱滞として捉える考え方が書いてあります。このことは鍼灸は気を動かすという治療法です。この気の流れを解明した経絡説が形成される上での思想的な背景が準備されたのです。前漢の武帝期になって劉安が編纂した『淮南子』になると、気考え方はさらに大きく展開され、鍼灸医学を体系化する骨組みができたのです。黄帝内経に基づく鍼灸医学を気の思想で完成させたのです。今でも鍼灸がどうして気を動かして免疫を上昇させるかは完全に分かっている訳ではありません。ツボや経絡の意味も現代医学や現代科学でもまだ完全に解明されてはいません。この解明には時間がかかるでしょう。

このようにして、中国人が直覚的に悟った気の理論を正面に据えて発達させていったのが中国医学、つまり東洋医学であります。このような優れた古代中国人の直感的思考によって生まれた漢方医学には、漢方煎じ薬（湯液）、鍼灸、導引（あんま）、気功の4つがあります。古代の中国人が病気の原因も全く知らずして患者の病気の症状を楽にしてあげるために、何とかしてあみだしたのが、

この4つの方法だったのです。

あんまは別名マッサージといわれますが、中国漢方でなくとも体が疲れたり、凝ったり、痛みがあったりするときに、さすったり揉んであげたりすることで楽になることは、中国人ならずとも人類の全ての人を経験してきたことでしょう。生命の源になっている食べ物になっている植物の中に、病気を治す薬を見つけ出そうとするのも理の必然でありましょう。

最初に生まれた最古の医学書は前漢のBC2世紀頃に人体の生理や病理を論じた『黄帝内経（こうていだいけい）』であり、この本は特に鍼灸の方にウェイトがありました。続いて後漢の1世紀頃に薬物に関する『神農本草経（しんのうほんぞうきょう）』があります。365種類の薬物を上薬、中薬、下薬という分類に分けた優れた薬物学の書物であり、現在でも使われている主要な薬物が全て記されています。

さらに後漢末期の3世紀には漢方薬物治療の古典である『傷寒雑病論（しょうかんざつびょうろん）』という本が張仲景によって書かれました。現代でも漢方の聖典といわれています。この本は後に『傷寒論（しょうかんろん）』と『金匱要略（きんきようりゃく）』というふたつに分かれてしまいましたが、現在も実用書として用いられているのです。

ここで張仲景の人物像について [Wikipedia](#) から引用させてもらいながら、コメントもしておきましょう。

○張機（ちょうき）（AD150年? - 219年の間に生きた人といわれています）

張機は中国後漢の官僚で医師。一般には「張仲景」（仲景は字）としてよく知られ、その医学上の功績から医聖と称えられています。名は張璣ともいわれます。ちょうど、古代ギリシャのココス島の医師であったヒポクラテスが西洋医学の医聖であると言われていたのと似ています。ヒポクラテスも病人についての観察や経験を重んじて、患者から病気の本質を学んだのは張仲景と全く同じです。現代の医学のように、患者さんから教えてもらうのではなくて、製薬メーカーから免疫を抑えるだけの薬を使うだけで満足し、さらに医学会から標準治療という名の下で全て事足りりとしているのとは大違いです。

荊州の南陽郡（異説あり）で生まれた張機は親孝行で清廉であったため、孝廉として推挙されて官僚生活を送り、献帝の建安年間初期には長沙太守でありました。何十年か前に張仲景のお墓が中華人民共和国の湖南省の長沙で見つかったということで、日本でも新聞種になったことがあります。私たち漢方を志

す医者仲間たちにとっては実在の人物であるということが完璧に証明されたので、おおいに感激したものでした。(建安元年は196年にあたる。なお、その4年前までは孫堅が長沙太守にあり、建安三年にあたる198年には、張機ではない別人の張羨が長沙太守として劉表に叛逆したことが知られています)。

青年時代に同郷の張伯祖から医術を学んだといえます。彼は、後漢末期の混乱と更に追い討ちをかける疫病(二百人いた親族のうち3分の2が10年間のうちに疫病によって死亡し、うち7割が「傷寒病」(急性熱性疾患、つまり感染症)だったという)に心を痛め、官を退いて医学の研鑽に務める事になりました。死んだ残りの3割の病気の原因は何だと思いませんか?やはり全て腸チフス以外の感染症であり、破傷風やコレラやマラリアなどあったのです。古来から今もそうですが、若くして死ぬのはやはり感染症であったのです。感染症が制圧された現代文明においては、感染症で死ぬ人はほとんど皆無となり、長寿の時代になってしまったのです。医者は患者を脅かすために症状が激しければすぐに死んでしまうと患者を脅かし、免疫を抑える最高の薬であるステロイドを使いたがります。症状がよくなれば患者は命を救われたと思うのですが、再び後にステロイドの離脱症状が出現し、さらに重篤な症状になることを教えられないのです。

古代から伝わる医書の知識と自らの経験を加えて書かれたのが『傷寒雑病論』であり、後に「傷寒論」と「金匱要略方論」の2種類の書として分割されたことは既に述べました。彼の医学は医道に精通して治療にあたると同時に、謹厳さと柔軟性、強い責任感を持つ事を旨とし、先人の知識を尊重しつつも患者個々のケースに応じて必要があれば、独創的な治療を試みたと言われています。

中国の歴史も日本と同じく、神話伝説の三皇五帝が中国を治めた時代がありました。三皇は、伏羲(ふくぎ)・女媧(じょか)・神農(しんのう)であり、五帝は、黄帝(こうてい)・顓頊(せんぎょく)・帝嚳(ていこく)・堯(ぎょう)・舜(しゅん)であります。中国の先史文明は黄河文明や長江文明であり、このような中国の黄河文明が興ったのは5000年以上前といわれています。黄河の治水の功績があった禹(う)は、五帝の最後の舜により帝位を禅譲されたことは高校の漢文で勉強したことがあるでしょう。禅譲とは、中国でその位を世襲せずには有徳者に譲ることであり、堯が舜に、さらに舜が禹に帝位を譲った伝説上の話は皆さんご存知でしょう。さらに禹が帝位を舜から譲り受けたときに、「夏(か)」という国を作りました。この「夏」から有史時代が始まり、中国最古の王朝といわれています。夏の国は紀元前21世紀～紀元前16世紀ごろまで続きました。ついでに書けば「夏」の最後の君主は、暴君で有名な桀(けつ)であります。この桀は、「殷(いん)」の湯王に討たれ、夏が滅び、殷王朝ができたのです。BC1600年ごろであります。

もちろん人間が生きている限りは必ず病気が起こります。皇帝たちの仕事のひとつは病気を治すことであり、特に三皇の一人の神農は、民の幸せに心を砕き、農耕と医薬の祖とされ、今でも人々にあがめられています。この皇帝の名前を取って、『神農本草経』という漢方薬物の書物が後に書かれたのは既に述べました。伝説によれば、神農はあらゆる草木を毒味し、初めて医薬を生み出したとされています。五帝の最初の黄帝は、戦乱に荒れた神農の世を平定し、後を継ぎ、天地を司る陰陽五行の運行を初めて定めたといわれています。この黄帝の名前を託して『黄帝内经』という書物が書かれたのも既に述べました。

このように、張仲景の時代に至るまで、様々な病気に対する治療法が伝わっていました。一族の大半が傷寒で亡くなっているのを見て心を痛めました。そこで何とか傷寒の病を治療するために、既に書かれていた『黄帝内经素問』や『陰陽大論』さらに『平脈弁証』などの古代から伝わってきた医書を選び出し、研究し尽くして『傷寒雑病論』を作ったのです。

しかしながら今とは違って感染症を起こす原因がウイルスであるとか細菌であるとか原虫であるとかは一切知られていなかったのもので、薬物療法である漢方生薬を用いるしかなかったのです。この漢方生薬の用い方を症状に合わせてどのように使ったかを述べたのが『傷寒論』であります。『傷寒論』の傷寒というのは、今から想像するに腸チフスではないかと考えられます。

腸チフスとは腸チフス菌による感染症であります。サルモネラ属のグラム陰性桿菌で菌体周囲に鞭毛を持ち動き回ることができます。経口的に人に感染するのです。実はサルモネラはいわゆる食中毒といわれる急性胃腸炎を起こす腸炎菌や、腸チフスを起こすパラチフス菌以外に、人に病原性を持たないサルモネラ属に属する 2000 種類以上の菌がいます。現在でも小児の食中毒としては極めて重要な病原体が含まれています。黒色の血液が混ざった下痢と腹痛が主症状であります。

張仲景の時代はまるで衛生概念のなかった時代でありますから、腸チフスは汚い水や食べ物などに混在しているチフス菌を経口摂取することがしばしばあったのです。この傷寒論のはじめに張仲景は次のように書いています。「自分の身内は 200 人もいたが 10 年も経たないうちに 2/3 が傷寒（腸チフス）にかかって死んだ。そこで傷寒で死んでしまった人々のことを思い出し、古人の教訓を探し求め雑病論を作ったと書いています。

彼の親族たちが次々と死んでいったのは、腸チフス菌に人間の免疫が敗北して死んでいったなどと、彼に想像することは不可能でありました。その他の、死なないけれども様々な病気の症状が、免疫とウイルスや細菌やスピロヘーターやマイコプラズマやその他あらゆる種類の病原菌との戦いであったことも知る由もありません。つまり、中国に限らず地球上のあらゆる文明を作った我々

人類の祖先たちは、誰一人として死んでいく病気の原因が感染症であることを知りませんでした。つまり最初に述べたようにパスツールやコッホが活躍した19世紀の終わりまでは、病気の原因は誰も知らなかったのです。

従って、漢方生薬で腸チフス菌をはじめとするあらゆる種類の重篤な症状を起こす他の細菌やウイルスを殺すことはとても無理であります。昔は免疫の力でしか細菌を殺すしかなかったのです。もちろんその当時はインフルエンザウイルスも当然いたでしょうし、今も昔もウイルスを殺すのは患者の免疫だけですから、とてもではないけれども漢方で良い成績を上げることはほとんど不可能であったので、『傷寒論』を読んでも、彼がどれだけの「傷寒（流行性伝染病）」から患者を救ったかについては一言も言及されていません。

この傷寒論はまさに感染症の発病から治癒または死に至るまでの病状の変化を克明に述べ、それぞれの症状に対する漢方による治療法を示しています。まさにこの傷寒論は、現代でいう臨床免疫学の書物といえるものです。ところがこの傷寒論は、当時医学に強い影響を与え、かつ支配していた道教や仏教や神仙家の思想を取り入れなかったため、最も正しい臨床免疫学を詳しく述べた傷寒論は主流から外れていったのです。医学に宗教や思想が侵入してしまうと、患者の免疫の真実はどこかに消えてしまいます。傷寒論が主流から外れたのは、ちょうど病気は自分の免疫でしか治せないという真実や、免疫で治せなければ病気は治らないという真実、さらに医者はこの免疫を手助けすることしかできないのだという私の真実の治療が主流から外れているのと似ています。

彼は10年で120人も傷寒で死ぬ経過を実に詳しく述べました。現代の医者でも不可能なほど詳細正確に傷寒の経過を描写しています。まさに今から2000年前に免疫と傷寒と戦った経過病態を述べるとともに、それに対してどのような漢方を使うのがよいかを述べたのです。それが『傷寒論』であります。

彼は患者の症状で「傷寒」という病名をつけ、その症状のあり方や病気の進行のプロセスによって6つの病名に分けたのです。太陽病、少陽病、陽明病、太陰病、少陰病、厥陰病（けっちんびょう）の6つです。今から2000年近く前に、病気は自分の免疫と異物との戦いであるなどという本質が分かる由もありません。ただただ病人が苦しんでいる様子を精細に観察し、以上に述べた6つの段階に分けて、その段階に応じて用いる薬草を述べていったのです。

皆さん、病気の原因も何一つ分からずに、どうしてそれぞれの6つの病気に対して用いるべき漢方生薬を決めていったとお考えですか？まさに張仲景に至るまでの古代の優れた中国人の経験をふまえて独創的な処方を読みだしていったのです。言うまでもなく、原始時代から人類は病気に悩まされてきました。その間、遠く原始時代から数千年にわたって蓄えられたおびただしい経験的医学知識が累積されていきました。中国の戦国春秋時代には既に医学の専門書も

でき、221年に秦の始皇帝は中国を統一しました。この秦時代に確立された官僚制度にも医を司る太医令の官職が置かれるまでに発達していました。前漢（BC202～AD8）のはじめには、漢方薬、つまり薬用になる植物の書物、つまり『本草』ができあがっていたのです。この『本草』の記載には様々の漢方薬の性質や薬効の他に、採取法や調剤法や配合や禁忌（病状を悪化させたりするので用いてはならない薬や、治療の目的に沿わない薬）についてや服薬の仕方まで、あらゆる項目が網羅されていたのです。このような書物を通して張仲景は『傷寒論』を作ったのです。この書物は中国のみならず、中国周辺国家である韓国や日本は言うまでもなく、東南アジア全体においても、今もなお漢方医学の最も重要な文献として利用されることになったのです。

傷寒論の話は終わったので、金匱要略の話をしていきましょう。「金匱」という意味は金で作られた箱のことです。「要略」という意味はご存知のように概略という意味です。従って金匱要略とは「金で作った箱に納めておかねばならないほど大切な秘方を集めた概略本」となります。この本は感染症を取り扱った傷寒論とは違って、発熱性感染症以外の全ての病気について書かれています。現代的な言い方をすれば、いわゆる成人病であり、婦人病であり、かつ精神病の治療法について書かれています。中国医学の漢方薬の基礎は全て『傷寒雜病論』にあるといえます。その後の中国漢方医学は時代の流れの中で様々な紆余曲折を経て、いわゆる名医や名著を生み、数えきれないほどの医学の流派が生まれ現在に至っているのです。様々な時代に様々な漢方医が出現しましたが、基本的には漢方薬は免疫を上昇することができるので、その使い方についての理論が時代時代に変遷していったのでありますが、それについては後で詳しく述べます。

次に鍼灸医学の基礎が築かれたのは、中国の春秋戦国時代（BC770年～221年）に『黄帝内経』の原型が生み出されました。『黄帝内経』は気の通路を経絡として認識し、単に鍼灸医学の基礎を築いたのみならず、当時の世界的な医学水準を大幅に越えた内容が含まれています。『黄帝内経』は人体の生理や病理を解き、鍼灸により治療法が詳しく書かれたのです。中国医学の第一番目の古典として日本でも重要視されています。つまり鍼灸の理論は『黄帝内経』によって確立されたのです。ところが『黄帝内経』は難しすぎる部分があり、鍼灸による臨床実験の手引きとして作成されたのが『難経（なんぎょう）』であり、後漢の時代に作られました。以上、中国医学史のほんのさわりを書きました。本当の中国医学史を書こうとすれば膨大な書物になるでしょう。

中国医学において、免疫を上げて治せる病気は治した名医についていくつか面白い話を書きながら、彼らが治した病気の意味や彼らが治せなかった病気の意味についても、真実の医学という観点から説明をしておきましょう。

春秋時代（BC770年～403年）と戦国時代（BC403年～221年）の名医

○文摯（ぶんし）（BC770年～403年の間に生きた人といわれています）

春秋時代の宋の国の医者で齊の国の閔王（びんおう）がひどい頭痛で治らなかつたときに呼ばれ、「王を怒らせれば治る、しかし治れば私を殺すでしょう」という予言をして、予言通り王の頭痛は治り、殺されてしまったというエピソードがあつた名医です。なぜ殺されたかという、王の診察に來いという命令を何回も拒絶したために、王を侮辱したという理由で殺されたのです。

この齊の閔王の頭痛はヘルペスによる頭痛だったのです。なぜならばヘルペスの頭痛は免疫を抑えない限りは治るからです。中国の春秋時代の殺し合いの時代に、王たちもストレスいっぱいにして勝ち抜くためにステロイドホルモンを出し続け、繰り返し頭痛に悩まされた王が齊の閔王であつたのです。文摯は閔王を怒らせて、さらにステロイドホルモンを出し続けさせて、免疫とヘルペスとの戦いを一時的に終わらせたのです。こんな真実を知っていた文摯のすごさがお分かりになりますか？もちろん言うまでもなく、文摯は経験的に怒れば頭痛が治るということを知っていただけのことですが。ワッハッハ！

文摯が閔王を怒らせてひどい頭痛を治癒させたのは、「五行説」を実行しただけだといわれています。ここで五行説について少し詳しく書きましょう。五行説は天地万物は人間を含めて5つの基本的な属性からなっていると考えます。このような考え方は殷の時代の宗教的観念にまでさかのぼることができます。中国の古代人は日常の生活や生産活動に不可欠な基本物質として認識したのが5種類の物質であります。「木・火・土・金・水」の5種類であります。嫌味なことを言わせてもらえば、中国の古代人の目には空気が見えなかつたので、空気を加えなかつたのは当然です。空気がなければ生きることができないのに。この一つをとっても中国人の医学思想の限界があることが分かるでしょう。

この五行の物質である「木・火・土・金・水」の間の病気の関係を最初に説き始めたのは、戦国時代末期の鄒衍（すうえん）であるといわれています。その後、五行学説は秦漢の時代になって、例の陰陽論と結びつき、五行陰陽説と呼ばれるようになり、医学のみならず政治や社会活動の理論として活用されるようになりました。さらに前漢の『淮南子』では五行の物質の間に、相生・相剋の関係が主張され、事象の発生、発展、変化、交替などの運動法則として確立されたのです。

五行説が人間の生理や病理などの医学にまで応用されるようになったのは前

漢から後漢にかけてであります。特に鍼灸医学の基礎理論は陰陽論と共に五行理論が医学に取り入れられ、大きな発展を遂げたと言われています。相生とは、ひとつの事物が別の事物に対して手助けする作用があることです。相剋とは、ひとつの事物が別の事物に対して抑制的な働きをすることです。東洋医学では五行の相生・相剋の関係については全ての自然界で行われているものと考え、人体でも正常な生理現象が相生・相剋によって営まれていると考えるのです。相生・相剋の関係を利用して病気も治すことができると考えたのです。

これを現代的な言い方をすれば次のようになります。皆さん、ホメオスタシスという言葉をご存知ないですか？あるいはフィードバックという言葉をご存知ないですか？さらに副交感神経と交感神経の働きは互いに抑制的だということはご存知ですね。つまり一方が強くなりすぎれば、それを抑える必要が出てきます。逆に一方が弱すぎれば、それを手助けする必要が出てきます。特にホメオスタシスというのは人体の恒常性や平衡性を維持することです。つまり常に自然も人体も全て、あるバランスを維持された状態で営まれているのです。従って五行説の相生・相剋の関係と難しい言い方をしていますが、何も特別な理論ではないのです。非常に素朴な事象の成り立ちを述べているだけなのです。ただその関係が2つの事象の関係ではなくて、あえて5つの物質を持ち込んだために少し複雑に見えるだけなのです。ところが残念なことに、全ての出来事を5つに分けようとする考え方を無理矢理適用させようとしたものですから、そこに矛盾が出てきました。確かに「風が吹けば桶谷が儲かる」という理論は、それこそあり得ることではありますが、単なる偶然の一現象にすぎません。人事をはじめとする全ての事象はファクターが多すぎて、それを絶対的な五行陰陽論で説明しようとすることは土台無理です。

○医緩（いかん）（春秋時代の BC 6 世紀頃の秦の国の医者）

彼は今なお用いられている「病膏肓（やまいこうこう）に至る」という言葉を生んだ名医といわれています。晋の国王の景公が病気になり、晋の国の医者の手には負えなくなり、秦の国の名医である医緩が呼び寄せられました。医緩が景公を診察したところ、「病気は肓の上、しかも膏の下にある」と診断しました。現代の解剖学で説明すれば、肓の上とは横隔膜のことであり、膏の下とは心臓の下のことであります。医緩が言うことには、「鍼を用いても届くことができない場所であり、かつ薬草も届かないので治すことができない」と言ったのです。結局のところ、鍼灸や漢方薬を用いても治らない病気は一体何でしょうか？おそらく癌です。免疫を高めても治せない病気は癌ですから、医緩は治療

することをやめたのです。漢方や鍼灸で免疫を上げて癌を治せるものであれば、私はとっくに治してしまっています。もちろん医緩が癌という病気を知っていたかは疑問ですが。中国では人体にメスを入れることを許されていませんでした。従って解剖学が全く発達することがありませんでした。晋の医者たちが色々と手を下しても良くならなかつたので、わざわざ遠い国の秦の医緩を時間をかけて呼び寄せるまでのいきさつを考えると、急性の感染症、つまり傷寒ではなかつたはずで、すると残る死に至る病は癌です。おそらく膵臓癌ではなかつたかと考えられます。現在でも膵臓癌の悪性は恐るべきものがあります。この医緩と景公の故事により、不治の病にかかることを「病膏肓に至る」というようになったのです。

○扁鵲（へんじゃく）（春秋時代の BC500 年頃の人）

歴史上の中国の名医といえば、この扁鵲であります。姓は秦、名前を越人といいます。扁鵲はひとりの医師ではなくて、過去の中国の名医を何十人も集めたシンボルが扁鵲であったといわれています。従って、扁鵲に関する本を読むと、人間離れをした名医ぶりが華々しく描かれています。扁鵲は死んだ人を生き返らせたというエピソードを持った人ではありますが、彼自身が言うことには「私が死人を生き返らせることができたのではなく、これは当然生きるべき人を起き上がらせただけだ」と言ったといわれています。これは一体何を意味するのでしょうか？2500 年前の医学が全く暗黒時代であったにもかかわらず、扁鵲は病気を治すのは薬でもなく医者でもないことを知っていたのです。病気を治すのは患者自身であるということ、なんと 2500 年前に見抜いていたのです。この点が、扁鵲が中国医学史上でナンバーワンの医者であるといわれる根拠なのであります。この扁鵲が中国医学史のトップに位置しているということは、扁鵲が体現している中国漢方、中国鍼灸が世界ナンバーワンであることを中国人自身が自負してきたのです。私も彼らが作り上げた中国医学の全ては今も昔も今後も世界のトップに居続ける資格があることを認めざるをえません。なぜならば彼らの医学こそが人類の免疫を手助けし続けることができるからです。

しかしながら漢方の薬草は育てるのに 1 年はかかります。3000 年前の薬草の栽培方法は現代と何も変わりません。生産性を上げる余地がほとんどないので、従って金儲けができません。現代の中国は政治体系は社会主義ですが、経済は完全に資本主義であります。金が儲からなければ企業の存立が脅かされます。中国の製薬メーカーもまず儲けを考えます。病気を治すことは二次になります。従って患者の免疫を手助けて病気を治せる漢方薬用植物を栽培

するよりも、近代的な製薬工場を造り、免疫を抑える薬を無限大に作る方がお金が儲かるので、徐々に徐々に漢方の生産量も減っていくでしょう。おそらくは世界中から漢方生薬が消え去っていく恐れさえあります。対症療法、つまり患者の免疫を殺して症状だけを取る新薬に、病気を治すことができるけれどもお金が儲からない漢方薬が駆逐されるのも近い将来に起こることになるでしょう。残念ですが。

○淳干 意（じゅんう・い）

現代の医者には、必ず診療録に患者の病状を記し、それに対してどのような処置を行い、どのような薬を投与したかを保険診療をやっているかぎりには必ず残さなければなりません。皆さんご存知のように、これをカルテといいます。カルテという言葉はドイツ語であり、英語で言えばカードという意味になります。昔の中国漢方ではこれを「医案」といっていました。現代は大学の医学部を卒業し、国家試験に合格して医師の資格を国家から得た人だけが医療をやることができますが、昔の中国や韓国や日本や他の東南アジアでは医師国家試験などというものはありませんでしたから、いわば誰でも漢方医になることができたのです。つまり偽医師などは誰もいなかったのです。従ってどんな漢方の生薬を使うかは自由勝手だったのです。ところが現代の医者にはまず病名を決めて、病名が決まれば大学の医学部の授業で習った標準医療といわれるやり方に従って自然に薬や処置が決められているので、決められた範囲の医療しかできないのですが、昔は誰でも医者になれたので、患者一人一人に対してどのように医療をするかについての考えを決めて、それを記したものが『医案』と呼ばれるようになったのです。つまり病名はどうでもいいのです。

私もこの考え方に同意します。もちろん私の考え方の根本は、病気の原因をまず考えます。いつも書いているように、現代文明に残された最後の病気の2大原因はヘルペスと化学物質であり、病気の症状はこれら二つの原因と免疫が戦っているときに見られる現象にすぎないことが分かっているので、ヘルペスには抗ウイルス剤を出し、敵が化学物質であるときには漢方や鍼灸で免疫を上げ続ければ、最後は患者の免疫がその化学物質と共存してくれるのです。

以前に述べたように、中国医学の大権威でいらっしやった某国立大学の名誉教授の元で、過去の中国漢方医が漢文で書いた『医案』をかなりたくさん読んだのですが、例のごとく陰陽や虚実や表裏などの漢方独特の言葉が羅列されているだけで、病気の原因は言うに及ばず、客観的根拠も何一つなく、ただただ漢方処方が書かれているだけで、治療の結果についても詳しく書かれていない

ので、これらの『医案』を読んでも全く興味が持てなかったことは既に語りました。この『医案』を勉強したのも、過去の中国漢方医がどんな治療をしたかよりも、漢文を勉強したかっただけで、高名な先生のセミナーに参加させてもらったのです。従って原因療法に基づく治療法である免疫を上げるために漢方煎じ薬を用いて医療をやっている私にとっては、何のメリットもなかったことを覚えています。

この『医案』をまず最初に中国で書いた人が『淳干 意 (じゅんう・い)』という人です。もちろんそれまでも医案は書かれていたのですが、淳干意の医案が中国に現存している最も古いものとされています。彼は前漢の初期の医者でありました。彼の書いた医案の中身は司馬遷の書いた『史記』に詳しく載せられています。司馬遷の史記は、黄帝内経を作った前漢の武帝までの歴史を記した歴史書ですが、そこに詳しく淳干意の医師としての詳しい人となりと業績が書かれています。特に淳干意の治療した 25 人の人たちの治療内容について述べられ、さらに 20 種類あまりの病気の症例ごとに患者の住所、氏名、病状、脈の状態、病因の分析の後に、薬草、鍼灸、治療方法、さらにその患者の生死の予想などが詳しく記載されているのです。現代のカルテには患者の生存と回復の予測（これを現代では病気の予後といますが）などについては絶対に書かないのですが、また書く必要もないのですが、昔は病気で死ぬ人が多かったので書かざるをえなかったのでしょう。この淳干意について詳しく知りたい人は、史記の列伝に書かれていますから、興味のある人は読んでください。この淳干意の列伝を読めば、前漢時代の医術の実際を知ることができます。

○郭玉 (かくぎょく)

次に後漢(AD25～AD220)の時代に鍼灸の名人であった「郭玉(かくぎょく)」の話をしていきましょう。郭玉は、後漢の和帝 (在位 89～105 年) の時代に医者 of 役人である医官の副長官の「太医丞 (たいいじょう)」まで上りつめ、和帝にその鍼灸の腕前を驚嘆させた鍼灸の名人でした。昔から人間は痛みで苦しんできました。痛みさえ取れば幸せになれるという人はたくさんいます。とりわけ鍼灸は痛みを除去する効能においては抜群の効果を発揮します。しかも免疫の遺伝子を変えずに、であります。いわば郭玉は皇帝である和帝の痛みを即座に鍼一本で治してしまったのです。そして和帝の寵愛を一身にし、官吏である医官の副長官まで上りつめた人でした。

現代の西洋医学は、痛みを生み出す免疫の遺伝子の働きを変えることによっ

て、痛みを一時的に取るだけで、痛みの原因となる異物を処理しないどころか、逆に古来から人間の神経にすんでいるヘルペスウイルスをどんどん増やすだけです。二重で人体にとっては害悪を加えているだけなのです。一方、鍼灸は免疫の遺伝子に全く影響せず、かつ免疫を上げながら痛みの感覚を一時的に麻痺させるだけです。最高の痛み取りの手技になるのですが、日本政府は健康保険で治療することを許してはくれません。残念です。鍼灸が全て3割負担になれば、痛みがこの世から永遠になくなってしまおうでしょう。痛みがこの世からなくなると製薬メーカーも医者も仕事がなくなるので許さないのでしょうか？と勘ぐりたくなるぐらいです。

皆さん、西洋医学の麻酔薬を使わないで、鍼だけで手術のための麻酔を行う鍼麻酔法をご存知でしょうか。麻酔薬とは一体なんなのでしょうか？神経の伝導は電気信号によるものというよりも、神経にナトリウムイオンを連続的に神経細胞外から入れることによってナトリウムイオンが伝わっていくと考えてよろしい。神経線維の膜にナトリウムイオンが連続的に流入していく通り道があります。これを神経のナトリウムチャンネルといいます。痛みが感覚神経に伝わらなくしようと思えば、この神経のナトリウムチャンネルを塞いでしまえば、ナトリウムイオンが神経線維に流入できなくなり、神経伝達が遮断され痛みを感じなくなってしまうのです。従って、麻酔薬とは神経のナトリウムチャンネルを妨げることによって神経をブロックし、痛みを感じる脳にその痛みの信号を送ることをできなくさせる薬です。この麻酔薬と同じ効果が、鍼をツボに刺すことによって生み出すことができるのです。これを鍼麻酔といいます。

○華佗（かだ）

漢時代の最後の名医は『傷寒論』を書いた張仲景（AD150～AD219）ですが、既に語り終わりましたから、次は後漢の末から三国南北朝時代の人である華佗（かだ）について話を進めましょう。華佗は、中国では外科の元祖といわれています。彼がさらに有名なのは、三国の魏の始祖である曹操に殺されたエピソードを持っている人であることです。曹操は後漢に仕えて、後漢の崩壊の原因となった黄巾の乱を平定し、新たに魏を作り国王となったのです。曹操が華佗の名医ぶりを聞き、常に自分の健康を守らせたのです。華佗は漢方生薬の優れた使い手であったのみならず、鍼灸においても天才ぶりを発揮し、その令名ぶりが魏の皇帝の曹操にまで伝わったのです。

華岡青洲が世界で初めて全身麻酔をして乳ガンの手術をしたときに用いた麻酔薬は「通仙散」ですが、この通仙散のことを別名「麻沸散（まふつさん）」と

いうのです。実はこの麻沸散を使って、歴史上初めて全身麻酔による切開手術を行ったのは、まさにこの華佗だといわれているのです。まずこの華佗はこの麻沸散を酒で飲ませました。酒に酔って知覚が鈍麻になり、かつ麻沸散でさらに意識がなくなったときに病巣である腹や背中を切開して異物を切り取ったのです。おそらくこの異物は今でいうガンだったのでしょう。病巣が腸管にあるときは切断し、洗浄し、その異物を切り取って、残りの腸管をつなぎ合わせて、後は縫合したと伝えられています。そしてその縫合跡に神膏という軟膏を塗って縫合創を治したのです。傷は4～5日で回復し、1～2ヶ月で全快したのです。このような華佗の手術ぶりや治療については後漢書の方術伝の『華佗伝』に書かれたり、皆さんがご存知の、三国志の方技伝の『華佗伝』に記されています。もちろん彼が手術をした患者の多くが感染症で亡くなったことでしょうか？

どうして曹操は華佗を殺したのでしょうか？曹操は長年、頭風眩（とうふうげん）という病気で苦しんでいました。頭風眩とは、頭がしびれたり痛くなったりめまいがする病気です。つまり現代の病名では、本格的な「メニエール氏病」です。昔からヘルペス性の頭痛やメニエールは、ストレスの多い国王たちを悩ませていたのです。敵を殺し尽くして王様になる人ほどストレスに耐えた人は他にないはずです。ストレスに耐えている間にヘルペスウイルスが神経に増殖し、国王になってホッとした瞬間に免疫が回復し、ヘルペスとの戦いが始まるのです。魏の国王曹操もヘルペス性慢性頭痛に悩まされていたのですが、華佗の鍼ですぐに治るものですから、華佗をいつまでも自分の左右に置きたがったのです。ところが華佗は自由人で早く郷里にかえりたいと願い出て、その後妻が病気だと言って戻らなかつたのです。ところがいくら曹操が華佗を呼びつけても戻らなかつたので、曹操が使者を遣って調べさせると妻の病気が仮病だと分かり、怒りに狂った曹操は華佗を殺してしまったのです。

華佗が発明して有名になったもう一つの健康法があります。皆さん、中国には儒教はあっても唯一神を作ってその神だけを信じる宗教はありません。しかしあえて中国漢民族の宗教といえば道教があります。道教の始祖は黄帝と老子であります。中国の古来からの巫術がありました。巫術はシャーマニズムといい、シャーマンを仲介として霊的な存在とのやり取りを中心とする宗教儀式がありました。シャーマンというのは、ある薬草を飲んで自らをトランス状態、つまり我を忘れて恍惚状態になって、神、精霊、死者の霊などに直接交渉し、その力を借りて託宣や予言を行うと同時に、病を治したりすることができることとされた宗教的職能者のことです。シャーマンを巫女（みこ）と訳してもいいのです。このような古来からの巫術や老荘思想や道教の流れをくんで、それを陰陽五行説や神仙思想を加味して不老長生の術を古代の中国人はあみ出していた

のです。これを導引といいます。もっと一般的には気功といわれているものです。

シャーマンがどんな薬草を食べてトランス状態に没入したかについては後で詳しく書きます。今の麻薬や覚醒剤といわれるものを摂取して、神と交信して占いやまじないを行ったのです。このような薬草の主成分を分析して、近代になって医薬品の原料として用いられたからであります。これらの薬用植物は直接的に免疫を上げる訳ではないのですが、脳の中樞神経どうしを結びつける神経伝達物質として解明され、免疫を抑えずに痛みを除去する薬として使われるようになったのです。

この導引の術に華佗は新たに「五禽の戯（ごきんのぎ）」を発明して加えました。皆さん、中国に行くと、今現在でもこの五禽の戯は一般大衆が朝に公園で行っているのを見られたことがありますか？もうひとつ中国人が好きな健康法に太極拳があります。この太極拳は陰陽の変化の理にのっとりたものだといわれています。ゆるやかに円を描く動作が主であります。身体の鍛錬や精神修養に行われています。五禽の戯と太極拳の違いはすぐに分かります。華佗が作った気功は5種類の動物の仕草を行うために五禽の戯といわれるのです。5種類の獣は「鳥、鹿、猿、熊、虎」であります。この5種類の動物の身体の使い方を真似ることによって、気を集めて生のエネルギーを強めるものとされており、確かに五禽の戯をやっている人の話を聞くと、身体が不快なときに起き上がって、5つの獣のどれかの真似をすると心が和らぎ、汗が出て元気になるといいます。現代もなお続いている導引、つまり気功のひとつである五禽の戯を創作したのも華佗でした。

○皇甫 謐（こうほ・ひつ）（AD215～AD282）

彼は三国時代の魏の国の人であり、西晋の頃まで生きていた人です。名家の出であったのですが、家は貧乏でありました。思うことがあり、20歳を超えてから寝食を忘れて様々な学問の独学をし始めました。彼は医者というよりも民間の学者でありました。実際彼は医業をやったことはないのです。

曹操の子の曹丕（そうひ）によって作られた魏王朝は家来の司馬昭（しばしょう）によって滅ぼされ、司馬昭の子の司馬炎（しばえん）が帝位について晋を打ち立てました。これが晋の武帝であります。武帝は噂で聞いていた優秀な皇甫謐を晋の官僚にさせたいと何回も招いたのですが、病弱の故に断り続けました。皇甫謐は自分の病気を治すために独学で医学の書を読んだのですが、そのような医書が役に立たないということを知り、中国医学の原典である『黄帝

内経』に戻ってそれを十分に勉強しました。生理、病理、診断、治療、漢方生薬、さらに養生法を論じた『黄帝内経』から選び出して編集し直し、新たに『素問』という本と、さらに『黄帝内経』から鍼灸医学の基本となる人体の組織や機能、さらに鍼の使い方が書かれている『靈枢』から、同じように大事なところを選び出して編集し、新たに『鍼経』という本を書きました。さらに最後に最古の経穴書、つまり鍼のツボの書物である『明堂孔穴鍼灸治療』を元にして、この書物を編纂し直し、かつ注釈をしたのです。これら3つを合わせて、『鍼灸甲乙経』という本を書いたのです。この『鍼灸甲乙経』は、皇甫謐自身が病気になって苦しんだために、やむにやまれずに病気というものがどのようなものであるかを世間一般の人に伝えるために書いたといわれています。

彼自身は何も医者ではなかったのですが、役に立つ医学書を学問好きな皇甫謐が、自分の病気を自分で治すために必要に迫られて書き記した本ですが、まるで私が自分の病気を治すために、3つ目の大学である京都府立医大に入り直したのと似ていますね、ワッハッハ！！今時、皇甫謐のような医者でない人間がこのような医学書を書いても誰も読む人がいないでしょう。なぜこのような書物を医者でない皇甫謐が書けたと思いますか？それは、中国医学の原典が『黄帝内経』であり、この『黄帝内経』が書かれたときに、既に中国医学の根本が築きあげられていたからです。

張仲景の書いた『傷寒論』の話は最初にしました。この『傷寒論』も古代からの医書を選んで編集したものなのです。いわば中国医学は、中国古代からの病気の治療に用いられる漢方生薬と鍼灸のやり方についての経験を集大成したものが『黄帝内経』であるのです。

○葛洪（かっこう）（283年～343年）

過去の中国の医者たちを調べているうちに、最も強く印象づけられることがあります。彼らは全てが全て、誰かに医学を学んだという訳ではなくて、自学独習でその時代の名医になっていったということです。過去の優れた先輩たちが書いた漢方処方薬や鍼灸のやり方を書いた書物から学べば誰でも医者になれたのです。しかもこれらの中国の伝統医学は全て患者の免疫を上げることができるので、患者を殺さない限りは患者の免疫を手助けができるので、患者が治せる病気は治すことができ、一方いくら手助けしても、患者が治せない病気は治せなかつただけの話なので、診断学とか検査学とか病理学とかは全く必要でなかったのです。医学そのものが即、治療学であり、治療することが即、医学であったのです。つまり病人が来れば、既に述べた随証治療に従ってすぐに漢

方処方を出し、かつ鍼灸を実行すれば良かったのです。漢方の処方出し方も、もちろん数多くの患者を見る中で、患者から一番効果のあるやり方を患者から学んでいったのです。親類縁者に医術を行う人がいれば、それを継ぐために個人的に教えてもらったりすることはできるのですが、現在のように医者になるために医学を修める大学があったわけではないので、自学独習せざるをえないのは当然といえば当然だったのです。人を殺すような漢方生薬もありませんし、お灸で人が死ぬわけでもありません。ただ鍼はある程度の熟練さが必要だったのですが。

葛洪も向学心に燃えて儒学を始め、諸子百家の学や導引や養生の方法が書かれている書物を勉強し、と同時に、医術をも極めていったのです。中国の医学史上に名医として言い伝えられていった医術者たちは、その名声や天才ぶりがその時代の皇帝に伝わり、皇帝の寵愛を得るのですが、それだけでは満足せずに、生涯全ての分野における真実を求め続けるという求道者の感があります。この求道者に通ずる道には、いかに健康で長生きするかという目標があります。葛洪の場合も最後は世間的な名声を逃れて神仙道に没入して、「尸解仙（しかいせん）」になって天に昇ったといわれた人です。尸解仙とは、仙人の道を極めた人が死んだときに、体の抜け殻を残して、魂だけが天に昇る術を身につけた人のことだといわれました。

特に葛洪は、不老長寿をもたらすという薬を作る「煉丹（れんたん）の術」に秀でていたといわれています。煉丹とは、道教を実践している道士たちが辰砂（しんしゃ）を練って金丹を作ることです。辰砂は硫黄と水銀を化合したものであります。辰砂は、硫黄と水銀が混ざると金のように見えたので、金丹ともいったのです。さらに辰砂のことを丹砂（たんさ）ともいうことがあります。「丹」の元の意味は赤土でありました。実はこの赤土は硫黄と水銀が化合したものであるので辰砂ともいわれるのです。

皆さんもご存知のように、水銀というのは白金のような色合いがあり、しかも形を自由に変える金属であります。普通金属というのは固形でありますから、自由自在に姿を変え、固形物であるようでしかも液体のような水銀は、何かとても神秘的な力を有しているように現在でも見えるでしょう。時には得体の知れない生き物に見えることもありますね。このような金色に似た黄色の硫黄と、変幻自在の神秘的な水銀とを化合して作った薬を、色々割合を変えたり様々な他の物質を混ぜてみたり、ときには熱してみたり冷やしてみたりして、様々な工夫を凝らして長生きするための煉丹術に励んだのです。煉丹術をさらに発展させていけば中国にも西洋に負けない科学の道が開けたのでありまじょうが、残念ながらそこまで研究する知識人はいませんでした。

どういふものか煉丹術で作った煉丹を、道教では根拠もなく不老不死の薬と

して飲んだのです。葛洪も最後は不老不死の薬を求めて煉丹に励んだのですが、この煉丹によって作られた辰砂、つまり水銀と硫黄の化合物を飲み過ぎて水銀中毒となって死んだ状態を尸解といったのかもしれませんがね、アッハッハ！ちなみに水銀といえば、水銀中毒で有名になった水俣病があります。この水俣病は有機水銀であるメチル水銀による中毒ですが、一方、葛洪が作って飲んだ煉丹は無機水銀であり、葛洪の最期は無機水銀中毒による死であったので、尋常な死に方ではなかったもので、尸解という死に方をしたと語り継いだのでしよう。

中国医学史で今なお名を残すことができたのは、彼らが生きていた間に書いた優れた書物のおかげであり、その書物が現代まで知られているからです。葛洪の書いた最も有名な書物が『神仙伝（しんせんでん）』と『抱朴子（ほうぼくし）』と『肘後備急方（ちゅうごびきゅうほう）』（『肘后方』ともいいます）であります。この『肘後備急方』は救急に役立たせる書物であり、実用的で効き目のある簡単な漢方処方薬と、簡単にできるお灸や鍼のやり方が書かれています。ちなみに抱朴子というのは葛洪自身が自分につけた名前です。この『肘後備急方』を増補訂正して発展させたのが、この南北朝時代に興った梁（りょう）の国の「陶弘景（とう・こうけい）」であります。

○陶弘景（とう・こうけい） 別名：陶宏景（456年～536年）

陶弘景は10歳のときに葛洪の『神仙伝』を知って昼夜勉強し、養生の志を持つようになりました。彼は万巻の書物を読み、20歳にもならないうちに、梁の前の斉の国の大臣に任じられた人でもありました。斉の国が梁の国に変わったときに、この梁という国名をつけたのが陶弘景でありました。彼も葛洪と同じく道教を信じ、道教の教団を作ったほどでありました。各地を遍歴して仙人になることができる「仙薬の薬」を探し求めました。例のごとく仙薬の薬とは、服用すれば不老不死が得られるという薬のことです。

葛洪にしろ陶弘景にしろ、医者というよりも万能の学者と言った方がいいくらいです。ときには政治にもかかわり、ときには帝王のアドバイザーになったりしたのです。ちょうど西欧のルネッサンス期のレオナルド・ダヴィンチやミケランジェロのような時代の天才的な知性の代表者ともいえる人たちです。はじめに書いたように、梁の武帝が斉に代わって王朝を開いたときに、陶弘景は吉凶を占って、武帝の国を梁という国名を見いだして武帝に進言したりしました。討伐などのときにも武帝は陶弘景に諮問したために、世間の人は陶弘景を“山の中の宰相”と称したぐらいです。

陶弘景は中国の本草の中興の祖ともいわれる人でした。本草というのは、薬用になる植物のことをいいます。本草学は薬物の研究にとどまらず、現代の博物学ともいってよいほどです。漢の時代に作られた『神農本草経』が最初の本草の本ですが、陶弘景はこの『神農本草経』を発展させて、『神農本草経集注』という薬物学の本を書きました。皆さん、中国の黒竜江周辺のアムール虎が激減したことはご存知でしょう。なぜ激減したのでしょうか？虎の骨は強壮のために酒の原料や薬として使われるので、密猟が行われ虎が激減してしまったからです。虎の皮はただ単にコートに使われたりするのみならず、いろいろ薬物として使われてきたのです。本草学の研究は単に植物だけではなく、玉、石、木、竹、禽獣、虫、魚、亀、貝など動物や鉱物も含まれています。もうひとつ陶弘景が書いた本に『肘後百一方』がありますが、これは葛洪が書いた『肘後備急方』を増補改訂したものであります。

皆さん、なぜ中国人は古来から不老不死の研究に余念がなかったのでしょうか？かの有名な秦の始皇帝も不老不死の薬を求めさせるために、徐福に莫大なお金を渡して東海の三神山に不死の仙薬を探させたのですが、コロッと騙されてしまいました。この世に不老不死の薬などはないからです。どうして中国の皇帝をはじめとして、当代随一の優れた学者たちは不老不死の薬を作ったり探したり、できれば仙人になって永遠に生きたいと思ったのでしょうか？答えは簡単です。宗教がなかったからです。西洋においては永遠に生きることはハナから考えていません。西洋人にとって最も関心にあったことは、死ぬのは当たり前で死んだ後にどのような運命が待っているかということです。その答えを宗教、特にキリスト教は出してくれていました。死んでしまったら神の国に行けるか、地獄に行くかのどちらかでした。神の国に行きたい人は、生きている間に良いことをしなさいと説いたのです。つまり死んだ後は神様が面倒を見ましようというわけです。中国人は死んでしまえば全てが終わりだと考えているので、できる限り長生きしようとして、長寿のために煉丹の術を磨いたり、仙人になる方法をいろいろと考えたのですが無駄でした。まさに仙人になる道が宗教であり、道教であったのです。

道教を遵法していた人たちは肉体の不滅を求めたのです。現代の人たちも肉体の不滅を求めようとあがいています。つまり肉体の快楽を最大限に増やそうとあがいているだけです。知さんは有限の時間の中でいずれ消え去る肉体よりも、無限の時間の中で永遠に続く何かを求めていたのでしょうか。その何かは私には分かりません。

隋（581年～618年）と唐（618年～907年）の時代に移りましょう。

○孫 思邈（そん・しばく）別名：孫 真人（そん・しんじん）（581年～682年）

100歳以上も生きた長命の人だといわれています。彼もやはり医者というよりも神仙家で、羽化登仙（うかとうせん）して死んだ後も仙人として尊敬され、その百歳以上も生きたという伝記にも、神秘めいた脚色があります。羽化登仙とは、人間に羽が生えて仙人となって天に昇ることです。7歳にして書を読み、1日に1000字の文字を暗唱したといわれています。20歳を過ぎるときには、莊子や老子をはじめとする諸子百家の学問にも精通し、隋を立てた文帝からは是非召し抱えたいと請われたのでありますが、他の神仙家と同じく病気だと言って行かなかったのです。さらに隋が滅びて唐の3代目の高宗にも招かれたのでありますが断り、神仙の術の修行を続けたといわれています。孫思邈はその当時の学問の全てに通じたのですが、とりわけ医学にも精通していました。『備急千金要方（びきゅうせんきんようほう）』という医学全書を書きました。この書名の由来は、人の命は千両の黄金にも代え難いという意味であり、孫思邈自身が子供のときに苦しんだ病気をできるだけ治してあげたいという思いで名付けたのです。彼も隋唐時代の天才的学者であったのです。

『備急千金要方』には病理、薬の処方、鍼灸の治療法だけではなくて、医師の修学法や、倫理についても述べているほか、一部は自分自身の医者としての経験も記され、医療の全てが網羅されており、まさに『備急千金要方』は医学全書といってもよいぐらいでした。この『備急千金要方』には7世紀の中国医学について知りえる全てが書かれていました。いわばこの7世紀の医学百科事典ともいえるものです。

彼が医術に志したのも、幼い頃にたびたび病気にかかり、この子供のときにかかった病気もいわゆる死なない程度のウイルス感染症や細菌感染症であったのですが、よく医者にかかったために薬代、つまり漢方煎剤の費用で財産を使い果たしてしまったので、若い頃から医学書から学び、身近な人の疾病も治すことができるようになったのです。このような病気は傷寒ではなくて、風冷（ふうれい）と呼んでいました。実は孫思邈は、この千金翼方を表すときに、非常に苦労して江南、つまり揚子江の南の地に伝わる傷寒論のテキストを探したのでありますが、この張仲景が作った傷寒論には随証治療に従って臨機応変に治療できる処方が書かれていたのですが、江南の医者がこの素晴らしい傷寒論に基づく治療法を極秘にしてなかなか手に入れることができなかったので、『備急千金要方』には傷寒を論じた部分はかなり少なかったのです。既にご存知のように、傷寒というのは急性伝染性感染症であります。その後数十年経って初めて傷寒論の本を手に入れて、『備急千金要方』を補うものとして『千金翼方』

を 30 巻書き表したのです。「翼方」の意味は、まず翼は鳥の翼であり、方は処方の方であります。鳥の翼に処方を運んでもらって、国中の全ての病気を治してあげたいという思いがあったのでしょう。まるで私がこのホームページを書いている気持ちと同じだったかもしれません。アッハッハ！天才、孫思邈といえども、最後は張仲景の『傷寒論』に戻ったのです。だからこそ、中国医学は「傷寒論に始まり、傷寒論」に終わるといわれるのです。

○王翻（おうとう）（670 年～755 年）

彼も歴史に名を残すほどの中国の天才の一人です。彼の祖父は唐の第 2 代の太宗皇帝の宰相になった人です。当時の人口統計は残されていませんが、今も昔も天才が最も多かったのは、最も人口の多い中国であることは確かです。生まれつき親孝行であったのですが、母親が病気がちであるうえに自分も病弱であったため、名医から学び、かつ医書をよく読み、医学を学んだのでありました。私も医者になるつもりは全くなかったのですが、既に何回も書いていますが、目にボールが当たって偏頭痛と嗜眠と不愉快さで 15 年近くも悩み続け、この自分の病気の原因を勉強して治せるものなら治そうと京府立医大に入ったのは、天才・王翻の 1 万分の 1 は真似をしたかもしれませんね、ワッハッハ！

昔の人物が世に名を残すのはやはり書物です。彼は『外台秘要（げだいひょう）』という医書を残しました。唐以前の時代の医書を集めてまとめたものであり、いわゆる当時の唐の国立図書館に 24 年も出入りして、数千巻の書物を学び 40 巻にまとめたものであります。処方についての記載が極めて多く、6000 以上の処方がおさめられています。この当ても 6000 種類の病気があったわけではないのですが、様々な生薬を組み合わせた処方を集め尽くしたのでしょう。いずれにしろ、植物から採取され薬草は全て免疫を上げることができるうえに、毒にならない薬草を集めたので、薬草はいわば医食同源であり、死なない限りは病気を治すのは患者の免疫であるので、必ずどの漢方処方も免疫を上げる価値があります。ただ 6000 処方もある意味は何だと思いませんか？今でこそ栄養不良な患者は誰もいませんが、昔は個人差が大きかったので、患者の栄養状態に合わせて様々な生薬の組み合わせを試み、最良の組み合わせを選んだ処方を集めたものと思われます。さらに免疫を上げるといっても、どの器官や臓器で症状が出ているかに合わせて処方を変えていったので、6000 種類という処方が集められたのでしょう。

『外台秘要』は、孫思邈の『千金翼方』や、かの有名な『傷寒論』や『金匱要略』などの元の姿を窺う上でも貴重な資料となっています。従って唐以前

の医学を勉強する人にとっても重要な参考文献の役割を果たしているのです。ところがこの『外台秘要』は、お灸療法は記載されているのですが、鍼療法は危険だとして原則的には削除されているのです。おそらくその時代に素人が勝手に鍼療法をして、「生兵法は怪我の元」ということわざがあるように、人を死に至らしめた例が多かったためでしょう。

やっと宋の時代の中国医学に到達しました。宋王朝は趙匡胤（ちょうきょういん）が960年に創建し、北方から攻め入った金の国によって1127年に宋（北宗）は滅びました。南方に落ち延びた宋の一族が再び南宋を1127年に打ち立てたのですが、1279年に元に滅ぼされました。

○王 惟一（おう・いいつ）

王惟一は北宋の鍼灸学の第一人者でありました。当時、鍼の経穴（ツボ）についての学説や鍼の打ち方について様々なやり方があり、人命を害する恐れもあったので、正しい経穴学を確立する意図から、1026年に『銅人腧穴鍼灸図経（どうじんゆけつしんきゅうずけい）』を編纂しました。腧穴とは、中国で使われている言葉であり、日本で使われている経穴、つまりツボのことです。王惟一は、銅で人体を鑄造させ、これを銅人といい、銅人の体に経脈と絡脈の2つの気血の通路を経絡といい、その経絡の通り道とその途上にある経穴（ツボ）を記し、そのツボの名前も書き記したのです。経絡だけが銅人の表面に記されたのではなく、経絡と内臓の関係を明らかにするために、その経絡とつながりがある人体の中にある臓腑（内臓器官）も全て作られて、銅人の体の中に人工の臓器が備えつけられていたのです。今で言えば、解剖学や手術のやり方を教えるために作られたプラスチックの人体模型の原点といえるものです。この銅人に記された経穴の数は354穴で、後代の経穴学の原点となったのです。現代のWHOが承認している経穴の数は351となっています。その後、北宋ではこの銅人を用いて医師の試験を行ったといわれるほど精巧に作られていたのです。ちなみにその試験方法は、銅人の表面に黄蠟（おうろう）を塗り、中に水を満たしておき、受験者に鍼の経穴を当てさせて、穴にうまくあたれば水が出て合格とし、はずれれば水が出ないので不合格としたのです。

○宋慈（そうじ）（南宋時代 1127～1279）

彼は南宋時代の1247年に中国で最初、もちろん世界で最も古い法医学の専門

書となる『洗冤集録（せんえんしゅうろく）』という本を書きました。宋慈は現代の上級国家公務員の試験よりもはるかに難しいといわれている「科挙の進士」に合格した秀才で、広東の刑法官として司法や検察の重職を歴任した正義漢でありました。不審な死に対して疑問を明らかにし、無実の罪で濡れ衣を着せられていた多くの人々のために法医学的な見地からその疑いを晴らしていったのです。冤罪は人間が自分の快樂だけを最大に増やそうとする遺伝子を持っているので、今もあらゆる社会で起こっています。この冤罪を晴らすために『洗冤集録』を書いたのです。「冤」というのはご存知のように無実の罪のことであり、冤罪と同じ意味です。「洗う」はまさに洗い流すという意味で、無実の罪を綺麗にしてただすという意味で、『洗冤集録』と名付けたのです。この書は彼自身の長年の経験の中で、罪なき人を救った記録であります。正しく罪を罰するために、どのようにして罪を確定するのかを系統的にまとめたものであり、法医学領域における死因の鑑別、生理・病理・外科手術についても述べられています。この後中国では罪人を調べる時に判断の基準に用いる書は全てこの『洗冤集録』によっているのです。

○銭乙（せんいつ）

北宋時代の人で、中国医学の小児科の祖といわれている人であります。北宋の皇帝であった神宗の皇子のてんかんをよくしたことで、皇帝の寵愛を得ました。銭乙が飲ませた薬はまさに漢方であり、もちろん彼が飲ませた薬は免疫を上げることができるのです。必ずヘルペスに対して、皇子の免疫は勝つことができるので、言い換えるとヘルペスを三叉神経核に押し込めることができるので治すことができたのです。原因も免疫のイロハも何も知らなかった銭乙は、漢方を飲ませるだけで皇子のてんかんをよくしたのです。というよりも、やはり皇子が自分のてんかん発作を治したと言った方が正しいかもしれませぬ。今なおてんかんの原因や脳の免疫は謎に満ちあふれていますが、どうしててんかんが起こるかについて少し考えてみたいと思います。と同時に、小児の熱性痙攣とてんかんの関わりについても述べてみましょう。

今も昔も、小児は自分の症状を医者に正確に訴えることができないので、医者困らせます。しかしながら病気の原因や治し方を昔の医者も患者も知らなかったのですから、小児の病気の正しい診断はなされたことが実はないのです。ただ症状を見極めることを診断と思い込んでいただけなのです。このような何となく病気を診断するために、中国医学では4つの診断の手がかりである、望（ぼう）・聞（ぶん）・問（もん）・切（せつ）を用いて行いました。望診は医者

の視覚を通して行い、聞診は医者聴覚と嗅覚を通じて行い、問診は医者問かけに対する患者の応答によって行い、最後の切診は指や手のひらの触覚を通じて行うものです。

私は30年前にはこの四診をやっていたのですが、そのうちに病気は病気の原因を知ることが一番大事だということが分かり、いつの間にか問診以外はやらなくなりました。四診を全てやったところで病気の原因を突き止めることができないからです。もちろん問診は十分に病気の原因が分かるまでやり続けております。今では問診だけで病気を治すことができるようになりました。というよりも、病気を患者さんに治させることができるようになりました。いつも言っているように、病気を治すのは患者の免疫であり、現代文明の病気の原因は、化学物質とヘルペスと風邪と成人病、つまり贅沢が作った病気と、老化による後天的遺伝子病である癌と、生まれつきの遺伝子病しかないということが分かり、無駄な四診をする必要がなくなりました。必ずやるのは問診だけです。言うまでもなく、心の異物と戦う人は心の病にかかりますが、これも精神の薬で治すことはできません。心の異物が何であるかを見極め、それを除去することができない限り精神の病は治すことはできません。除去できなければ心の異物を受け入れるか、諦めるかのどちらかしかありません。

銭乙が小児の病気を診断するのに最も重んじたのは、望診の際の顔面や体の色つやであり、顔面に現れた症状を面上症といい、目に現れた症状を目内症と名づけたりました。こんな診断法は全く意味がなかったのですが、彼なりに納得したのでしょう。彼の小児の病気に対する臨床経験をまとめた本が『銭氏小児薬証直訣（せんし・しょうにやくしょう・ちょっけつ）』であります。

今日は宋の時代から金・元時代の中国医学について書きましょう。金は南宋を滅ぼした女真族が建国しました。金は1115年から1234年まで続きました。その金を滅ぼしたモンゴル族のフビライが元（1271年～1368年）を打ち立てました。この時代の中国医学をとりわけ金元医学とことさら名付ける根拠を下に書きましょう。

中国を支配する支配者が変わったからといって、医学が同時に変わるものではありません。なぜならば病気は支配者とは関係ないからです。金元時代に生まれた医学を、とりわけ金元医学と称するのですが、金元医学の芽生えは既に宋の時代に見られます。高校の世界史の授業で学んだように、朱子学を作った朱子のことはご存知でしょう。宋代に新しい儒教が起こり、人間の道徳的な本性は宇宙の原理に基づいて生じると考える宋学が興りました。この宋学を確立したのが朱子であります。朱子は、万物は道理の本質である原理と、ガス状の

物質的要素との合成によって成り立つという理気二元論を唱えました。つまり理と気が合わさって万物が生まれると考えたのです。

さらに金元時代に医学思想が発展したのは、宋代において印刷術が勃興し、様々な医学書や思想書が数多く出版されたために、学者の間のみならず一般社会にも医学思想も広まっていったので、中国医学が大きく発展したのです。

この理気二元論の考え方と五行説を結びつけて、人体の病気を理解しようとして出来上がったのが運氣学説です。もちろん思惟の世界である朱子学のような哲学思想と、絶対不変の世界である遺伝子が支配する医学とを結びつけるのは、はじめから土台無理な話なのですが、中国医学の歴史を勉強するために必要な理論なので、少し説明しておきましょう。運氣学説ではまず天地と人体を貫いて五運と六気が存在すると考えました。五運とは、五行説で述べられた「木・火・土・金・水」であり、六気とは「風・寒・暑・湿・燥・火」であります。この五運と六気が自然の巡り合わせによって変化し、その変化が病気の原因になり、とりわけ、この変化が人間の脈にも現れると考え、とりわけこの時代に脈診が重要になったのです。この運氣学説である五運六気説が金元時代に中国医学の天才達が独自に研究し、理論を発展させて4つの学派ができたのです。そして新しい漢方の処方生まれたのです。その派のひとつである温補派の李杲（りこう）が作ったのが「補中益気湯」であります。「補中益気湯」は当院に来ておられる人はよくご存知でしょう。現在私がアトピーの治療で一番よく使っている漢方処方のひとつであります。その理由は後でお分かりになると思いますが、免疫を上げるからです。

この4つの学派のひとつが、劉完素（りゅうかんそ）（河間（かかん））（1110年生）の作った寒涼派であり、ふたつめが、劉完素の後継者である、張從正（ちょうじゅうせい）（子和（しわ））（1156年生）の作った攻下派で、みつつめが、李杲（りこう）（東垣（とうえん））（1180年生）が作った温補派で、よつつめが、朱震（しゅしん）（丹溪（たんけい））（1281年生）の作った養陰派であります。この4人について個々に下に詳しく書きましょう。その前に五行説について復習しましょう。以前に私が書いた文章を引用させてもらいながら、少し詳しく説明しましょう。

五行説は、天地万物は人間を含めて5つの基本的な属性からなっていると考えます。このような考え方は殷の時代の宗教的観念にまでさかのぼることができます。中国の古代人は日常の生活や生産活動に不可欠な基本物質として認識したのが5種類の物質であります。「木・火・土・金・水」の5種類であります。現代人でも納得できそうな考え方ですね。嫌味なことを言わせてもらえば、中国の古代人の目には空気が見えなかったのです。空気を加えなかったのは当然です。空気がなければ生きることができないのに。この一つをとっても中国人の

医学思想の限界があることが分かるでしょう。本当は「木・火・土・金・水・空」の6種類であるべきでしょう。ワッハッハ！

この五行の物質である「木・火・土・金・水」の間の病気の関係を最初に説き始めたのは、戦国時代末期の鄒衍（すうえん）であるといわれています。その後、五行学説は秦漢の時代になって、例の陰陽論と結びつき、五行陰陽説と呼ばれるようになり、医学のみならず政治や社会活動の理論として活用されるようになりました。さらに前漢の『淮南子』では五行の物質の間に、相生・相剋の関係が主張され、事象の発生、発展、変化、交替などの運動法則として確立されたのです。

五行説が人間の生理や病理などの医学にまで応用されるようになったのは前漢から後漢にかけてであります。特に鍼灸医学の基礎理論は陰陽論と共に五行理論が医学に取り入れられ、大きな発展を遂げたと言われていています。相生とは、ひとつの事物が別の事物に対して手助けする作用があることです。相剋とは、ひとつの事物が別の事物に対して抑制的な働きをすることです。東洋医学では五行の相生・相剋の関係については全ての自然界で行われているものと考え、人体でも正常な生理現象が相生・相剋によって営まれていると考えるのです。相生・相剋の関係を利用して病気も治すことができると考えたのです。

この五行説が、ますますまるで流行病であるかの如く宋代に隆盛を極め、相生・相剋の理論がさらに複雑になっていったのです。五行とは本来は、「木・火・土・金・水」であったのですが、これらの事物、あるいは概念が、人体を成り立てている五臓である「肝臓・腎臓・脾臓・肺臓・心臓」に無理やり割り当てられたのです。「肝臓は木であり、腎臓は水であり、脾臓は土であり、肺臓は金であり、心臓は火」となったのです。この五行を自然界に見られるあらゆる事物に当てはめるというバカなことをやったのです。例えば、家畜にも穀物にも果物にも、全ての物に当てはめていったのです。例えば「ニワトリは木、羊は火、牛は土、犬は金、豚は水」であるとしたのです。このレベルが金元時代の中国医学であったのです。

○劉 完素（りゅう・かんそ）

先ほど紹介したように、彼は寒涼派を創設した人です。実は五運である「木・火・土・金・水」と、六気である「風・寒・暑・湿・燥・火」については、中国医学の、というよりも世界医学の最高峰である、『黄帝内経素問』に書かれていた学説であります。かれはその学説をさらに研究し、臨床に応用したのです。劉完素は六気のうち、暑（熱）と火の二気がひとつとなると、暑さと火が運氣

の中で中心を占め、病気の原因となる『火熱論』を唱えたのであります。六気が全て火になるというわけで、これを彼は六気化火と名づけました。金元医学が新しい発展を遂げたといったところで、やはりその医学の元は『黄帝内経素問』にあります。この『黄帝内経素問』がいかに偉大な書物かがお分かりになるでしょう。

劉完素が、火熱が病気の原因としたのも頷けるところです。いつも私が言っているように、今も昔も病気の原因は感染症であるのです。感染症は細菌・ウイルスなどと戦うときに必ず熱が出ます。彼は熱を下げれば病気が治ると考え、漢方で寒涼剤といわれる生薬を用いたので、後の人々は劉完素のことを寒涼派と呼んだのです。今なお現代の医者も患者さんも同じように考えているようですから、医学は金元時代と何も変わっていないと言えるでしょう。アッハッハ！しかも現代の医学の方がはるかに罪が多いのは、無理やり解熱剤であるバファリンやロキソニンを飲ませるので、ますます免疫の働きがなくなり病気が重くしているので、劉完素の方がはるかに優秀な医者といえますね！アッハッハ！ついでに付け加えれば、体を冷やすと免疫を落とすことができます。ヘルペスも感染症のひとつであります。熱は滅多に出ません。ヘルペスとの戦いの時に体を冷やすと、ヘルペスとの戦いの症状も消えてしまうので、劉完素の寒涼派の効果はあった可能性があります。でもそれは間違っています。その理由は皆さん考えてください。答えを言いましょう。冷やしている間にヘルペスが増えているからです。

彼が作った今もなお使われている有名な処方、「防風通聖散」です。某有名製薬漢方メーカーが、「これを飲めば痩せる」ということで売り出しましたが、絶対に痩せることは無理です。なぜならば全ての漢方は光合成によって植物が作ったものであり、必ず三大栄養素である炭水化物・脂質・タンパク質が漢方の全ての生薬に含まれているからです。痩せる方法ほど簡単なことはありません。痩せるためには使う以上のエネルギーを食べなければ必ず痩せられます。要するに食贅沢をしなければ痩せることなんかは至極簡単なことなのです。食欲を美容欲に換えてしまえば、どんな人でもスマートになれます。東大に合格するためには自分より頭のいい人と競争せざるを得ませんが、スマート競争は敵がいないので簡単なことです。ワッハッハ！美しくなる欲望を増やせば増やすほど痩せられます。アッハッハ！

○張 從正（ちょう・じゅうせい）

彼は劉完素の説を受け継ぎ、六気である「風・寒・暑・湿・燥・火」などを、

全て病気を引き起こす「天の邪」と見なし、さらに「霧・露・雷・氷・泥」などの現象を「大地の邪」と見なし、さらに「酸・苦・甘・辛・鹹（かん）・淡」なども「飲食の邪」と考えたのです。ちなみに「鹹」は塩辛いという意味です。鹹湖（かんこ）という言葉をご存知でしょう。塩湖と同じ意味ですね。従って病気になると、これらの邪が病気の原因と考え、これらの邪を排除できる漢方治療をしたのです。つまり、邪を排除するために、発汗法、吐法、下剤法を用いたので攻下派といわれたのです。この考え方は一理あるのです。いつも私が述べているように、病気は人体にとって異物が入った時に、免疫がその異物を認識して排除しようとするときに見られる症状ですから、体内に入ったものを汗と吐と下の三方で排除するのは正しいのです。ちょうど私がアトピーは体内に入った化学物質を皮膚から免疫が出そうとしているので、ステロイドや抗アレルギー剤を使って出させまいとする現代医学は間違っていて、引っ搔いて出し尽くせば治ると言うのと同じです。もちろん張從正は免疫のことは何一つ知りませんから、出し切れない化学物質は、最後は免疫寛容を起こして共存するという事は知らなかったのですが。もちろん彼は攻撃だけではなくて、補い養う漢方も使っていたのは言うまでもありません。

○李杲（りこう）（1180年～1251年）

彼は脾胃論を唱えた温補派の祖であります。李杲は晩年に東垣老人（とうえんろうじん）と号したので、李東垣と呼ばれることがあります。李杲は全ての中国医学の天才達と同じように、『内経』・『難経』などの医学書を深く勉強しました。彼の生きた時代はチンギスハンが1206年にモンゴル帝国を打ち立て、西夏や金を攻撃し、トルコ系のホラズムを征服したりして、その影響で当時の社会環境が不穏であったために、社会的なストレス、飲食の不摂生、生活の不規則などによって引き起こされた病気が非常に多いことに気づきました。ところがこれらの病気は傷寒、つまりウイルス感染症や細菌感染症を治療する処方では治らないことが多かったことにも気づいていました。そこで李杲は当時のこのような病気の原因は、人の元気を奪いとる内なる傷を引き起こすという「内傷説」を唱えました。つまり、脾と胃が傷害を受けて様々な病気が引き起こされると考えたのです。これが彼の「脾胃論」であります。このような内傷を治す治療として、脾と胃の気を補って元気にする事ができる漢方である「補剤」をよく用いたのです。そのために李杲の一派は温補派と呼ばれたのです。この代表的な漢方処方が現在も最もよく用いられている「補中益気湯」であります。

温補派の李杲は、脾と胃の気を補う補剤をよく用いたのですが、実はこの処

方は現代の優れた免疫学から判断してもずばり百点満点なのです。皆さん、脾臓は何のためにあるかご存知ですか？彼は脾臓の働きを高めるということを知らないで、最高の答えを知っていたのです。李杲こそ張仲景を超える最高の中国医学者です。なぜだかお分かりになりますか？そうです。脾臓は最も大切な二次リンパ器官であるのです。つまり脾臓は細菌やウイルスを殺すために最も重要なリンパ器官のひとつであることを思い出してください。脾臓の働きも知らないで、ヘルペスウイルスを殺すための免疫をヘルプしていたのです。すごいでしょ！彼は張仲景が著した『傷寒論』に書かれた処方で治せない病気を見つけて、かつその治し方も脾臓を手助けしてあげれば、ヘルペスウイルスをも殺す力を増やすということを見つけたのです。ヘルペスの「へ」も知らないで、治し方だけを経験からあみ出したのは、今から1000年近く前であることを考えると度肝を抜かれそうです。李杲はすごい男です。私の1000倍も賢い男です。李杲に乾杯！もちろん李杲は脾臓がどんな働きをするのかも知らなかったのですが、経験的に人体を敵から守る臓器だということは知っていたことにおきましょね。ワッハッハ！

○朱震（しゅしん）（朱震亨（しゅ・しんこう））（丹溪（たんけい））（1281年生）

朱震亨の考え方は、李杲が唱えた温補派の考え方に似ていました。李杲は脾臓と胃の気を補って病気を治すことができると主張したので、彼は温補派と呼ばれました。もちろん李杲のいう脾臓とか胃とかは、必ずしも現代解剖学でいうところの脾臓と胃のことをいうわけではないということも知っておいてください。前回のペーパーで脾臓を面白半分で免疫器官としてコメントしましたが、実は彼らは免疫の概念もなかったわけですから、それこそ面白半分で書いただけであることも理解してくださいね。ワッハッハ！同じように、朱震亨も陰の気を補うことで病気を治せると主張したので、朱震亨は養陰派とか滋陰派と呼ばれました。劉完素や張從正の攻下派とは反対の考え方を唱え、攻めるのではなくて補うという李杲の考え方に朱震亨は似ていたのです。この2人の主張した医学を合わせて李朱医学と呼ばれたのです。

朱震亨（朱丹溪）の代表的な著書が『格致余論（かくちよろん）』であります。「各致」は「格物致知」の略語であります。格物致知というのは朱子学で用いられる言葉です。朱子学で「格物」という意味は、「自己とあらゆる事物に内在する個別の理を極めること」であり、「致知」という意味は、「後天的に得た知見を拡充すること」であります。朱震亨（朱丹溪）は、『格致余論』の前書きの

中に、「医学というものは、儒（孔子の教え）の教えの一部に過ぎない格物致知である」と書いたので、『格致余論』と名付けたのです。言い換えると、「医は仁術である」という言葉と似ていると考えてください。「医者とは人命を救う、孔子の教えである博愛の道である」というぐらいに理解しておいてください。

今も昔も、病気が何であるかということが正しく認識されていないので、医者が病気を語ることは本当は許されないのです。言うまでもなく、医学が学問である以上は治療に手を出すことも許されないことですが、何とか病気を治そうと中国の天才医学者が努力してきたのです。ここで改めて病気とは何かの正しい定義を復習しましょう。

病気というのは、人体に異物が入ってそれを排除しようとする免疫の正しい働きです。言い換えると、病気は良いことなのです。なぜかと言うと、人間にとって有害な敵を倒そうとする働きは間違っていますか？このような認識を、医学が高度に発達した現代においても世界中の医者が気づいていないことです。ましてや中国医学の天才医学者といえども、全て病気の意味さえも理解できなかったのは当然であったのです。だって病気の原因である異物は目には見えなかったからです。従って病気が起こる根拠も知らないで、中国の医者達は仕方なく思い込みで医学を語っているだけですから、雲をつかむような理屈を彼らは語っているだけなのは仕方ないことです。けれども何回も繰り返しますが、彼らは漢方生薬や鍼やお灸が免疫を上げるということを何一つ知らずして経験的に、かつ直感的に病気を治すことに貢献していることを知っていたので、病気の理論はともかくとしてやっていることは正しかったのです。彼らは知性の高い人たちですから、その病気が治る理屈をどうしても知りたかったので、陰陽五行論や五運六気説などの根拠のない屁理屈を並び立てただけなのです。世界で一番たくさんのお天才を輩出した中国の医学者たちが唱えた理論を屁理屈と言うのははばかるべきではありますが、医学を哲学として考えようとしたと言った方が正しいかもしれません。病気は哲学で治すことは絶対にできませんから、それでも何とかして病気を治す原理を見つけ出そうと様々な哲学を唱える医者が輩出したのです。その中で金元医学の中で最も流行したのが、李朱医学であったといえます。

さらに付け加えさせてもらおうと、漢方医学の理論の根拠は「気・血・水の乱れ」によって起こると漢方学者は口を揃えて言います。しかしなぜ気が乱れ、血が乱れ、水が乱れるのかの根拠は一切口にしません。確かに血と水は見てすぐに分かりますが、気とは何でしょうか？気についてはいずれ詳しく書くつもりですが、それこそ目に見えない気というのは一体なんなののでしょうか？人によってはエネルギーと言う人もいますが、そのエネルギーが異常をきたす根拠も誰一人語る人はいません。気にしろ、エネルギーにしろ、目に見えるもので

はありませんから、目に見えない病気の原因を目に見えない気やエネルギーに仮託したかもしれません。科学がなかった未熟な時代であったために仕方がないかもしれません。

さて皆さん、李杲の温補派とか朱震の滋陰派という言葉はどうやってできたかお分かりですか？李杲にしろ朱震にしろ、彼らは医学を形而上学の哲学と考えている訳ではありません。もちろん目の前にいる実態のある形而下の患者の病気を治そうと常に努力してきたのです。患者に自分の理論をしゃべったところで目の前の病気が治る訳ではありません。当然漢方を用い鍼とお灸を行います。それではどんな薬が温補の働きをし、かつ滋陰の働きをするのでしょうか？疑問に思いませんか？だいたい陰陽といったところで、目に見えない陰や陽であるものを、目に見える実態である漢方薬が陰陽を高めたり下げたりすることを誰が証明するのでしょうか？

漢方薬の処方はいく種類かの生薬から成り立っています。昔から、その生薬の働きに応じて「君臣佐使の働き」をすると決めています。君薬というのは、その漢方処方の中で最も中心的な作用を発揮する漢方生薬であります。臣薬というのは君薬に次ぐ重要な作用をもち、君薬を助けて治療効果を高めるといいます。佐薬というのは「補佐」の「佐」であり、君薬を助けて、随伴症状や合併症を治す薬であり、時には君薬の毒性や強すぎる作用を緩和するものです。使薬というのは、君薬、臣薬、佐薬の補助をし、さらにこれらの作用を調和するものといわれています。

それではどこにこのような仕事をするという証拠があるのでしょうか？実はどこにもないのです。漢方学者は口を揃えて、「その根拠は『神農本草経』に書いている」と言い張るだけです。さらに漢方薬の生薬は上薬・中薬・下薬と分けることがあります。以前書いたことがあります、『神農本草経』という中国で最高の薬物学の書物であると聞いたことがあるでしょう。この書物は前漢の紀元5年頃に書かれたのです。それまでに中国漢方で使われていた薬物（漢方薬）を整理分類して書かれた本であります。中国のそれまでの薬物学（本草学）を体系化し、確固たる基盤にしたのは、この論文のはじめに取り上げた紀元6世紀の梁の陶弘景が書いた『神農本草経集注』であることもご存知でしょう。梁という国の名前を決めたのも陶弘景であることもご存知でしょう。この『神農本草経』という書物において、漢方薬を120種類の上薬と、120種類の中薬と、125種類の下薬に分けたのです。上薬は命を養い、毒がなく、大量に長く服用しても害がなく、身を軽くし、気を増し、長生きできるとしたのです。この上薬が先程述べた君薬となるのです。中薬は毒があるものとならないものがあるが、考慮して飲まなければならないとしました。この中薬は臣薬となるのです。下薬は毒が多い上に長く飲んではいけませんが、寒熱邪気を除くことが

できるので、病を治す時には必要になることがあるのです。この下薬が佐薬や使薬となるのです。というようなことが書かれているのです。

しかしこのような分類はどうして生まれたのでしょうか？やはり経験です。例えば人類はどのようにして食べて良いものと悪いものを選び出したのでしょうか？やはり経験です。漢方薬も上で説明されていたように、上薬はいくら大量に長期に食べても、経験的に死ぬことはないということを知ったのです。ところが、下薬は大量に長期に飲めば必ず問題を起こすことを中国人は経験的に知ったのです。言い換えれば、上薬は食べ物であり、かつ体の病気を治すということを経験的に知ったのでしょう。だからこそ今なお漢方を使う薬膳料理が生き続けているのです。しかし古代の中国人は、食べ物に5大栄養素があるから食べるとか、上薬の漢方薬は、5大栄養素に加えて、様々な免疫の遺伝子を作るタンパク質が含まれているなどは、知る由もありませんでした。

○滑寿（かつじゅ）（1304～1386）

滑寿は、鍼の経絡と経穴についての教科書となる『十四経發揮』を書きました。王惟一（おういいつ）で既に述べましたが、十四経というのは、手足の三陰三陽の12経と、督脈と任脈の2つを加えた十四経を指します。王惟一は北宋の医者で鍼灸銅人を作った人だと覚えていますか？

滑寿は、幼い時から利発で学問を好み、若い頃から『黄帝内経』や『素問』と『難経』の古典をよく勉強しました。『素問』と『靈枢』の書物を比べながら、経絡と経穴を整理し、教科書に編纂したのが『十四経發揮（じゅうよんけいはつき）』であります。非常に簡便で実用であったので、後世まで活用され、特に日本への影響は大きかったのです。發揮という意味は働きと効用という意味であり、十四の経脈のそれぞれに鍼をすればどんな効果があるかを詳細に解説され、鍼灸医学を勉強する人にとっては極めて便利であったのです。

もう一度、十二経脈について復習しましょう。人体には経脈という気が巡る通路があります。その経脈には3つに陰の気が巡る通路と、3つの陽の気が巡る通路があります。3つの陰は太陰、少陰、厥陰であります。3つの陽は、太陽、少陽、陽明であり、合わせて6つの経脈があります。この経脈が手と足にそれぞれ3つの陰と3つの陽があると考え、合計12の経脈があるのです。督脈とは脊柱の上に気が巡る通路であり、任脈とは腹の真ん中に気が巡る通路であります。当院で鍼をやってもらったり自分でお灸をするときには、十四経脈のことを思い出してください。

さて明の時代（1368～1644）の中国医学に突入しましょう。明は1368年に漢人である朱元璋（しゅげんしょう）が創建しました。貧農出身でありながら、元末期の農民運動の中心であった紅巾軍に入って頭角を現し、元を倒したのです。1644年に女真人（じょしんじん）の清に滅ぼされました。清の時代は漢方医学の発展はほとんどなかったため、中国医学史も明で終わることになります。

○李 時珍（り・じちん）（1518～1593）

医者としてよりも中国の代表的な本草書、つまり薬物書である『本草綱目（ほんぞうこうもく）』52巻を編集した本草学者として有名であります。日本にも1607年に伝わり、中国のみならず、日本でも本草書といえば、この李時珍が編集した『本草綱目』を指すようになりました。有吉佐和子が書いた『華岡青洲の妻』を読まれた皆さんの中には、華岡家の診療室にまるで華岡家の宝物のように鎮座している『本草綱目』の描写を覚えておられる人がいるかもしれません。明代以前の本草書や医書を参考にして各地を立地調査し、薬物の採集と知識を集め、編集したものであります。李時珍は35歳のときから26年かけて苦心の末に編集された一大本草書であります。処方数は一万を超えていました。

李時珍もはじめは官僚になるために科挙試験に何回かトライしたのですが、全て落第したのち、医者であった父について医術を学び、『瀕湖派学（ひんこはがく）』という医書も著しました。彼はのちに瀕湖山人（ひんこさんじん）と号したので、『瀕湖派学』という書名にしたのです。医者としても治療が必要な時には、昼夜、貧富にかかわらず治療を断らなかったので、彼が医者をやっていた湖北一帯で名医として賞賛されていました。李時珍のこのような評判を聞いた楚王の子が気厥病といわれる病を患った時に、多くの名医たちは手をこまねいていたのですが、李時珍が治したのです。この気厥病というのは、気のめぐりが悪くなって、突然目がくらんで倒れてしまう病気です。おそらくこれはヘルペス性のでんかんであったか、ヘルペス性のメニエールの前庭神経炎の強度なものであったか、ヘルペス性脳血管炎であったのです。結局原因は例のごとくヘルペスであります。李時珍はこのような症状に対して該博な漢方処方知識を駆使して楚王の子の気厥病を治したのです。この漢方処方の名前は分かってはいません。楚王は感謝して李時珍を明の朝廷に高級官僚として推薦したのですが、官僚の仕事が性に合わず故郷に帰り、再び医療に従事し医学の勉強と著述に励んだのです。その中で歴代の本草学者が書いた本草書の内容に誤りが多いことを知り、実地に薬草を調べ尽くして『本草綱目』を作ったのです。この書物を知った明の当時の皇帝である神宗（万曆帝）が、素晴らしい

書物であることに感動し、この『本草綱目』を天下に知らしめるために出版させたのです。

もう少し『本草綱目』が中国全土に知られることになったいきさつを書きましょう。中国の本草学（薬草学を含めた薬物学）は、中国古代の伝説の人とされている三皇五帝のひとりである「神農」が全ての薬草、毒草を食べて作ったとされる『神農本草経』を原典として、多くの改訂や補足が繰り返されてきました。実は『神農本草経』は後漢時代に編集されたのです。後漢時代を下るにつれて、名称や薬効についての誤りや、重複、遺漏が多数含まれるようになっていきました。李時珍はこのような誤りを正すために、新しい本草学書の編纂を志したのです。参考にした書物は800種、彼自身も多数の薬物の実物を収集して研究を重ねて26年の歳月を費やし、その間に3回の校訂を重ねて、遂に61歳の時に、今もなお世界最高の本草学の書物である『本草綱目』全52巻190万余字をもって完成させたのです。

しかしながら、当時の中国の医学・本草学の世界では、李時珍の作った『本草綱目』が、それまで聖典視されていた『神農本草経』などの説や、配列・構成に対しても訂正を加えた事などから、李時珍に対して激しい糾弾が浴びせられる事となり、その出版は事実上閉ざされてしまいました。ところが李時珍に理解を示す人たちの奔走で、1593年に南京の出版業者・胡昇竜が出版に応じ、また時の皇帝万曆帝への献上の機会を得る事になりましたが、この直後に李時珍は病に倒れて急死してしまいました。献上された『本草綱目』は万曆帝から賞賛されて、出版に便宜が図られる事になりました。この本は日本などの周辺諸国のみならず、ラテン語などのヨーロッパ語にも訳されて、世界の博物学・本草学に大きな影響を与えたのです。現代では西洋医学の薬、つまり製薬メーカーの工場で作られる免疫を抑える薬が欧米で圧倒的な力を持っていますが、これらは病気を作るだけの薬であることを欧米人は何も気づいていないのです。東洋人は中国医学の本草学を今なお用いて免疫を上げて病気を治し続けているのです。漢方生薬は薬というよりも農産物であるために栄養がいっぱいであると同時に患者の免疫を上げることによって、患者自身に病気を治させることができるのです。

ここで『本草綱目』の元になった『神農本草経』について少し復習しましょう。「神農」についてはこのコラムのはじめのはじめに書きましたが、本草学（薬物学）の聖典とあがめられるほどに素晴らしい書物である『神農本草経』ですが、この著者や成立年代が正確に分からないのは不思議です。中国医学本草学の4大著作といえましょうか？まず第一にあげられるのは『黄帝内経』であります。第二の古典は中国における名医の代名詞とされる扁鵲の著作『難経』であります。これは紀元前500年頃に書かれました。第三の古典が医の処方

祖といわれる後漢時代の張仲景が書いた『傷寒雜病論』であります。最後の4つめが『神農本草經』であります。

皆さん、既にご存知のように、南北朝時代の「梁」の国名を決めた陶弘景のコラムを既に読まれたでしょう。陶弘景は薬物学の大家であり、陶弘景が作った『神農本草經集注』の書名に出てくる『神農本草經』の文章に整理改訂を加えたのです。従って、陶弘景以前に『神農本草經』が作られていたというのは分かっているのですが、その著者も成立年代も不詳な、今なおミステリーに富んだ書物なのです。著者は不明であります。推定されているのは『傷寒雜病論』を書いた張仲景が書いたか、外科の元祖であるといわれている華佗（かた）が書いたか、またはそのような中国医学の最高級の人物が書いたのではないか、といわれていることは付け加えておきましょう。

いずれにしろ、病気を治すのは自分の免疫でしか治せないのですが、その免疫を手助けする薬物の全てが記載されていたのが『神農本草經』であります。後漢時代に作られたことは分かっているのですが、この書物が明に至るまでの間に生じた誤りを正し、さらに整理したのが李時珍の『本草綱目』であるのです。私も妻のお父さんから譲り受けた漢文で書かれた『本草綱目』の写本を全52巻持っています。お父さんは漢文を容易く読める人であったので、この『本草綱目』を参考にして漢方処方を出していたのです。ついでに言えば、私は『神農本草經』の流れをくむ漢文で書かれた『經史証類大觀本草』も岳父から譲り受け、今も持っています。しかし漢文が難しいので正しく読み切ることは無理な本です。

○凌雲（りょううん）

凌雲は鍼の名人でありました。漢方薬を処方して病気を治したのではなく、鍼一本で明の孝宗皇帝の侍医になったのです。既に中国医学史を勉強してきたのでお分かりだと思いますが、中国は科挙に合格した高級官僚が支配する文が武に勝る国家でありました。従って頭のいい志のある若者は、まず科挙に合格すべく勉強を始めますが、途中で挫折してしまいます。そんなとき、自分が体が弱いとか病人を何とか治したいというヒューマンで勉強好きな若者は医師を志すのです。凌雲もその一人です。ある時に死にかけている病人を鍼で治した道士に会ったのです。道士というのは道教を修めた人ではありますが、彼らは鍼灸の技術を身につけた人が多かったのです。凌雲はこの道士に鍼の術を学んだのです。

鍼灸や漢方をやっている人が世に名を成すために一番大必要な条件は何だと

思いますか？その国の支配者、つまり皇帝の病気を治すことです。凌雲も地方の王様の病気を治し、皇帝に召されたのです。日本でも天皇の病気を治した心臓外科の先生が一躍有名になったのはご存知でしょう。このように皇帝の前で病気を治す腕前を示すことです。有名になっただけでは不十分です。実力を示す必要があります。そこで孝宗皇帝は、医を司る太医官として凌雲の実力を試したのです。鍼灸銅人を作った北宋時代の王惟一のことを覚えていますか？この鍼灸銅人を持ってこさせ、衣で覆ってその上から命じたとおりに経穴に刺さるかどうかを試験したのです。凌雲の鍼は百発百中であったので、すぐさま孝宗皇帝の侍医に任命されたのです。

そろそろ中国医学史も終わりに近づいてきました。結局人間が一番苦しむのは痛みです。痛みをすぐに消すことができるのは鍼に勝るものはありません。どうして氣息奄奄（きそくえんえん）である病人をすぐに回復させたり、死ぬほどの痛みを即座に消滅させることができるかについての科学的な話をせざるをえなくなってきました。そうです。漢方鍼灸の数千年の歴史の中で、「なぜ漢方が免疫を上げて病気を治すのか」や「なぜ鍼灸が痛みを取るか」について疑問を感じ、その答えを出そうとした中国医学の天才は誰一人としていませんでした。経験医学だけで作り上げてきた漢方鍼灸にその答えを求めさせるのは無理な話です。生理学、生化学、免疫学、病理学、解剖学など何一つとして分からなかった過去の中国において、そのような問いに対する答えは不可能なのです。現代でも目に見えない神経・リンパ管については、彼らは一切知識がなかったのですから、答えが出ないのは当然といえば当然なのです。その答えを私が出す日が近づいてきました。その前に最後の明の3人の中国医学史の人物について語って中国医学史は終わりにしましょう。その3人とは、張介賓（ちょうかいひん）であり、搜廷賢（きょうていけん）であり、載曼公（たいまんこう）であります。

○張 介賓（ちょう・かいひん）

中国医学の天才医師の例にもれず、若い頃から聡明であり、儒教の経書を読むのを好んだ人です。若い時から軍事学もやったのですが、成功しなかったのが故郷に帰り、大量の医書を読み、その医書の処方に従って医療を行って病気を治したので、医者としての令名が高くなっていったのです。漢方処方勉強さえすれば、過去の漢方医書に書かれた通りに出せば、結局は患者が病気を治してくれるので、頭のいい人は独学で誰でも医者になれたのです。しかも上手に治せばすぐに有名になれたのです。

皆さん、「八味地黄丸（はちみじおうがん）」という漢方処方をご存知でしょう。この八味地黄丸の中に地黄が使われ、8つの生薬で作られている処方なので八味地黄丸といいます。地黄という薬草の根から取ったものであり、それを蒸して乾燥させたものを熟地黄といいます。この熟地黄をよく用いたので、張介賓は張熟地（ちょうじゅくち）とも呼ばれました。彼は医術以外に天文、風水、律呂（音律）の学についても研究したことで有名です。特にエピソードが残っているのは、女性のヒステリーを見抜いたことで有名です。

○搜 廷賢（きょう・ていけん）

搜廷賢は『万病回春（まんびょうかいしゅん）』という書物を書きました。さらに推拿（すいだ）といわれるあんまについての手技や治療法についての『小児推拿秘旨（しょうにすいだひし）』を書いた医者として有名です。推拿という言葉が初めて作った人もこの搜廷賢です。この『小児推拿秘旨』は小児を対象としたあんまの本としても初めてのものです。

○載 曼公（たい・まんこう）

彼は先ほどの搜廷賢の下で医術を学んだのですが、明は侵入者の女真によって滅ぼされ、清王朝（1644～1911）が建てられた後は、逃れて小児痘科をしていました。痘科というのは、まさに天然痘の専門医のことです。日本において天然痘が初めて記載されたのは天平時代の735年でしたが、その後天然痘で日本人も中国人と同じように悩まされてきました。載曼公は、1654年徳川4代将軍家綱のときに日本の長崎に渡り、池田正直に天然痘の治療秘術を教えました。載曼公の天然痘に対する治療秘術は、1849年に伝来した西洋式牛痘接種に比べると、その場逃れの手段であったのですが、載曼公の治療法を用いれば少なくとも天然痘で死ぬことも減り、天然痘の後が顔に残る度合いも減ったのです。載曼公は隠元和尚が中国から興福寺にきたときに、彼の下で僧侶になりました。隠元が宇治の万福寺を建てるときにもついて行きたかったのですが、病に倒れて亡くなってしまいました。しかしその墓は隠元の建てた京都の万福寺にあるのです。

載曼公の人痘接種のやり方について説明しましょう。牛の天然痘にかかった人は二度と人間の天然痘にかからないということは、ジェンナーが知る前からもちろん知られていました。この事実を利用して世界で初めていわゆるワクチ

ンを作ったのがエドワード・ジェンナーでした。1796年に牛の天然痘にかかった乳搾りの女性から取った牛痘の苗（牛痘のかさぶた）をジェームス・フィップスという8歳の子供に植えました。このかさぶたを「痘痂（とうか）」といいます。牛痘を植えられたフィップスは軽い症状が起こった後に牛痘の症状が消えました。その後ジェンナーは本物の人間の天然痘の種、つまり人痘をフィップスに植えたのですが、天然痘が起こらなかったのです。繰り返し同じ人痘を多くの子供に植え続けたのですが天然痘は起こらなかったのです。1798年に公にしたのです。これがいわゆる牛痘法であります。

この牛痘法より前に、中国から人痘接種法が伝わっていました。つまり天然痘にかかった人のかさぶたを人間に植える方法でありました。中国ではこの方法が宋の時代に始まり、効果がなかったり、天然痘になったり、死んでしまったりしたので、一時この人痘法は衰えたのでありますが、明の時代に復興し、清の時代では多く行われました。この清の時代に例の載曼公が日本にやってきて、池田正直に教えたのです。その後、清の乾隆帝の1749年に完成した『医宗金鑑』の中に、この人痘接種のやり方について『種痘心法要旨』という形で載せられました。その人痘接種のやり方は4つあったのですが、天然痘にかかった人の膿やかさぶたを乾燥させたものか、あるいは湿ったものを、皮膚に植えるか、鼻腔に吹き入れるか、鼻腔の粘膜に植えるかを行ったのです。

なぜこの人痘法はジェンナーの牛痘法よりも普及しなかったのでしょうか？この人痘法は、いわば現代の生ワクチンであります。現代の生ワクチンは必ず病原性を弱めた生きた菌を接種するので、弱毒生ワクチンといいます。一方、宋の時代から始まり、清のはじめ頃に載曼公が持ってきた人痘法は、天然痘のウイルスをそのまま上の4つの方法で植え付けるのです。ところが、かさぶたの中には全くウイルスが入っておらず全く効果がない場合や、ときにはウイルスがたくさん入りすぎていたりして本当に天然痘になってしまったり死んでしまう子供も出てきたので一般に広く普及しなかったのです。天然痘にもかかっていないのに、天然痘を治すという治療法で天然痘になって死んでしまえば元も子もありませんから、一般大衆が人痘法を恐れるのも当然だったのです。医者側としては天然痘がウイルスによるものであるかどうかなどは全く知らなかったのです。そのウイルスを弱めて接種するなどということは夢にも思わなかったのは当然のことです。この人痘法がうまくいった人は天然痘のウイルスがごく微量であり、かつ免疫の力が強かった人だったのでしょう。うまくいかなくて死んだりした人は、人痘にたくさんのウイルスがいたか、接種された人の免疫が弱かったと考えられます。最後に付け加えておきますが、天然痘、つまり痘瘡は1980年にWHOが地球から絶滅宣言を出したことはご存知でしょう。